

権現山古墳(小美玉市)

説明板の所に人が集まっている/左手が権現山古墳



5世紀末葉～6世紀初頭築造の前方後円墳/後円部から石棺、前方部から木棺と二つの埋葬主体部が見ついているらしい/墳丘西側の造り出し部では、埴輪や土器を使った、当時の墓前祭祀の痕跡が確認されたと云う

権現山古墳

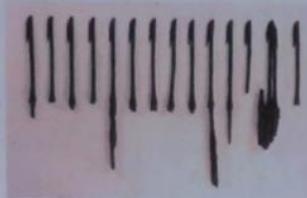
権現山古墳は、霞ヶ浦を臨む台地上に築造された小美玉市で最大規模の前方後円墳です。墳丘長八九五mを測り、墳丘西側のくびれ部に台形状の造り出しが付設され、墳丘周辺には盾形の周溝がめぐっています。平成八年（一九九六）、埋葬施設、埴輪列、造り出し部、周溝の確認を目的とした発掘調査が実施されました。

埋葬施設の調査では、後円部墳頂と前方部墳頂が大規模に削平されていることが確認されました。後円部での埋葬施設の痕跡は、石棺材に採用された雲母片岩（筑波石）と鉄鍬の破片のみですが、箱式石棺が存在したと推定されています。前方部は、木棺直葬で副葬品である大刀一口と鉄鍬三〇本が出土しました。

明確な円筒埴輪列は検出されませんでした。円筒埴輪は3条4段、朝顔形円筒埴輪が6条7段であることが分かりました。円筒埴輪の中には、器面に波状文があるものも確認されています。

造り出し部には大量の円筒埴輪、馬形埴輪、短甲形埴輪、人物埴輪などの形象埴輪が集中して配置されていました。また、祭祀に使用した土師器（壺、甕、坏）のほか、須恵器の筒形器台・直口壺が出土しています。築造時期は、出土遺物などから、古墳時代後期初頭（5世紀末葉～6世紀初頭）とされ、水上交通などを背景にした有力首長層の墳墓であると思われる。

前方部出土大刀



前方部出土鉄鍬（一部）



前方部遺物出土状況



須恵器（筒形器台・直口壺）



円筒埴輪



波状文がある円筒埴輪



短甲形埴輪

平成三十年三月

小美玉市教育委員会

正面にくびれ部を見たところ/左手が後円部、右手が前方部/西側から見たところ [\(クリックしてビデオを見る\)](#)



左手の後円部を見たところ



右手の前方部を見たところ

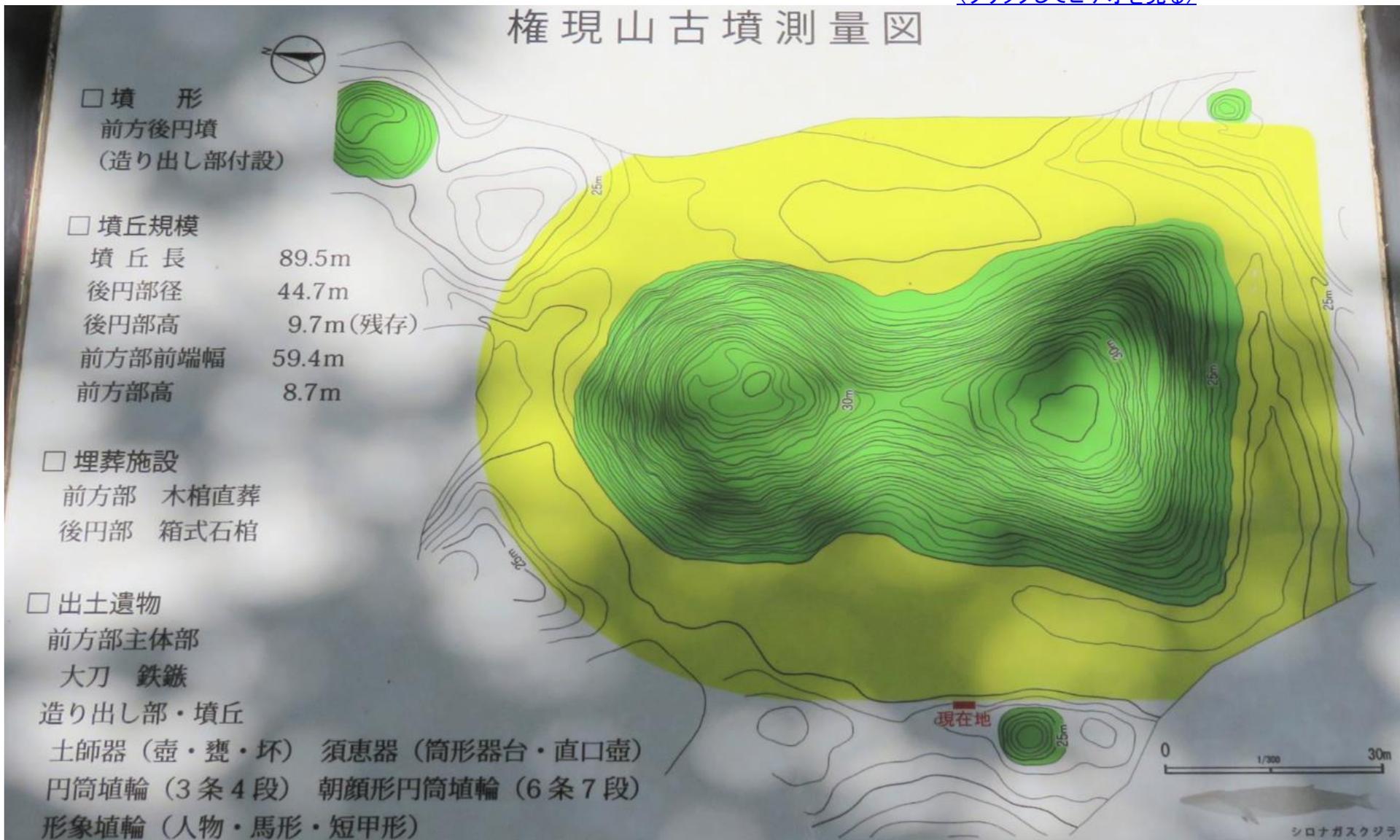


ここにも説明板が立っている



盾形の周溝が巡っている/西側前方部のくびれ部近くに、造り出し部が見て取れる/陪塚とされる墳丘が三ヶ所記されている(緑の部分)
[\(クリックしてビデオを見る\)](#)

権現山古墳測量図



正面が造り出し部と思われる



さて、ここは前方部墳頂/前方が後円部方向



前方部からくびれ部、後円部を見たところ



左手の墳丘裾でくびれ部、後円部方向を見たところ



くびれ部から後円部を見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



ここが後円部墳頂/小祠が置かれている



これは後円部墳頂からその背後を見下ろしたところ



振り返って後円部墳頂から前方部方向を見たところ



後円部からくびれ部、前方部を見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



そこで左手を見たところ



同じく右手を見たところ



右手の墳丘裾で前方部方向を見たところ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



これが墳丘西側にある、陪塚とされる墳丘の一つ



前方部の南側は霞ヶ浦高浜入りがすぐ近くに迫っている/霞ヶ浦を見下ろす台地上にあることが見て取れる
[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



さて、ここはすぐ近くにある小美玉市生涯学習センター玉里史料館

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



また、こんなものもあった/移設復元された旧新治郡田余村尋常高等小学校校門



説明板

旧新治郡田余尋常高等小学校 校門

小美玉市立玉里小学校の前身である田余尋常高等小学校は、明治42年(1909)から昭和37年(1962)まで現在の玉里総合支所の敷地にありました。昭和37年5月、県道紅葉石岡線を挟んだ北西側の現在地に移転しましたが、赤煉瓦造りの校門は平成になっても残されていました。大正時代の古写真によると、門柱には「新治郡田余尋常高等小学校」の表札が掲げられていたことが分かります。

平成14年、県道改良工事に伴って玉里民家園内に移設復元されました。



大正時代中頃の校門と校舎

校門前 左:豊崎鬼子松8代校長 右:高橋理四郎田余村助役
(玉里小学校創立百周年記念事業実行委員会発行「あゆみ」より)



移設前の校門(平成13年撮影)

こちらは小美玉市民家園/旧小松家住宅/小美玉市指定有形文化財(建造物)建第六号/江戸中期(18世紀後葉)



上層農家の住宅で、土間の部分と厩の部分との二つの曲がりを持つ、霞ヶ浦周辺の特徴的な民家らしい

—小美玉市民家園—

旧小松家住宅

小美玉市指定有形文化財（建造物） 建第六号

旧小松家住宅は、小松家（上玉里）から寄贈を受け、平成七、八年にかけて、解体・復元・保存・修理を行い、現在地に移築整備したもので、農家の日常、農業生産および村落社会での風俗習慣などを知ることができる貴重な文化財です。解体時における調査の結果、次のような特徴をもっていることが明らかになりました。

◆ 建築時期は、「田の字型」への移行がみられる「ひろま型」の間取り、三本溝の敷居^{しきい}、ひろま部分の差し鴨居^{かもい}、細い梁^{はり}、など（へや）への出入口の「なんどかまえ」、しとみ戸などの意匠・構法から、十八世紀後葉（江戸時代中期・約二四〇年前）と推定され、現在、玉里地区に残る民家では、最も古い様式のものとして残っています。

◆ 江戸時代中期における上層農家の諸様式をもっています。古文書に「寛政三亥」（一七九二年）、「庄屋宇衛門代」とあることから、庄屋格の民家であることが分かり、推定建築年代とも一致しています。

◆ 県北地方だけでなく、県南地方にも分布した「曲り屋」です。しかも、土間全体が大きく曲がる「土間曲り」であり、さらに、うまやがもう一つの曲りをもち、全体で二つの曲りをもつ珍しい様式です。

◆ ひろまのとなりの部屋は、さんべや（産部屋）と伝承されていました。しの竹のすのこの一部が解体時に発見されたため、さんべやとして復元されました。当時の出産事情を今に伝える貴重な資料です。

◆ 建物全体を解体時の調査成果に基づき、可能な限り、建築当初の姿を忠実に再現しています。部材も使用できるものは、最大限に活用して復元しています。

平成二十五年三月

小美玉市教育委員会
小美玉市玉里史料館

参考ホームページ

<https://massneko.hatenablog.com/entry/2020/02/02/000000>

<https://blog.goo.ne.jp/iunko-f2/e/bc1c6584418d697dfd334815f6220db6>

http://www.asahi-net.or.jp/~fx3j-aid/kofun/ibaraki/64_tmri/03405-gongen.html

<https://kofun.dosugoi.net/e1096397.html>

<https://rubese.net/gurucomi001/?id=1496368>

<http://haniwaproject.livedoor.blog/archives/16048128.html>

